

## 山鳥坂ダムはいらない市民の会 基調報告

山鳥坂ダム建設事業は、民主党政権になってから事業凍結され、翌年平成22年(2010年)11月から国土交通省四国整備局が、「ダム事業の検証に係る検討」をするという検討してきました。今年1月に洪水調節、流水の正常な流量の維持について、もっとも有利な案は山鳥坂ダムであると国に答申し、国土交通大臣が事業継続を決定しました。

検討の主体は四国地方整備局で、検討にかかわっている構成員は、愛媛県知事と土木部長、肱川流域の首長と役場の職員です。この人たちがダムを推進してきたメンバーから成る国の有識者会議のきめた「代替案検討における評価軸」に従って検討するというものです。これでは結論は初めから決まっているようなものです。

検討の内容は、洪水対策については21案、正常流量については9案を提示してありますが、河川整備計画レベルの目標に対して安全を確保できるというダム案以外の事業費は、総額が1200億とか1600億とかいうだけで、具体的には全く示されないまま、コストと実現性で「ダム案が最も有利」とされています。

はたして肱川に山鳥坂ダムは要るのでしょうか。

山鳥坂ダムの基本計画について、旧建設省も国土交通省も基本計画の「見直し案」での分水を中予側が拒否するまでは、「分水とダムは一体のものであり、分水がなければダムはない」といっていました。これは山鳥坂ダムが分水のダムであり、治水のために必要だとは認められていなかったということです。

愛媛県が昭和45年9月(1970年)に「南予水資源開発計画」を発表しました。この中に肱川からの中予分水があります。その後昭和48年(1973年)に肱川の治水計画が変更されました。肱川に流れる洪水の最大の量を、100年に1回の降雨により発生する洪水として、ダムで調節しなければならない量を多くして、中予分水の為にダムをいくつも作ることができる工事实施基本計画になりました。そのダムの1つが山鳥坂ダムです。

100年に1回の洪水に対応する対策は、あまりにも莫大な費用と時間がかかると言って、現在のひじ肱川の整備計画は40年に1回の洪水の対策ということになっています。

ですけれど、今、国交省四国整備局は、どうしてもしなければ水害はなくせない河道の堆積土砂の除去はしないと決め、100年に1回の洪水に対応するという、山鳥坂ダム、鹿野川ダムトンネル洪水吐き、河川改修を行っています。

私たちは水害がなくなることを望んでいます。100年に1回の洪水で大洲地点を流れるという毎秒6300トンを出す山鳥坂ダムで毎秒400トン調節するという話よりも、現在

の、毎秒3000トンで大きな被害がでる状態の安全度を上げていくことが重要です。

河に堆積している土砂を除き、水がよく流れる状態にしなければダムを造っても水害は減りません。

現在の肱川の河川整備計画は、住民に説明された「素案」のときには河道内掘削をしないという言葉はありませんでしたが、その後整備計画「原案」には「河道内掘削を行わず」と書き加えられています。

鹿野川ダムの「トンネル洪水吐き」も、住民には全然説明されないで最後に原案に書き加えられています。

山鳥坂ダムと鹿野川ダム改造は一体の事業であるとして、改造については選択取水設備のことしか説明されませんでした。

鹿野川ダム改造事業は平成16年(2004年)に、山鳥坂ダムと一体の事業として肱川河川整備計画に位置付けられ、その後平成18年(2006年)に事業費420億円の新規の事業になっています。

平成22年(2010年)3月に大洲市議会で、「市民はトンネル洪水吐きについて何も知らない、説明すべきだ」と市議に詰問され、3月末にトンネルの吐口への進入路の入札を終えて、4月になってトンネル洪水吐きの簡単なパンフレットを各戸配布しましたが、それにはトンネルの大きさも書いてなかったという隠しかたです。国交省四国整備局は、5月にトンネル吐口への進入路の工事を始める数日前に住民説明会をしました。住民に隠して整備計画に入れられてからなんと6年経ってからです。この説明会の席で、「鹿野川ダムのトンネル洪水吐きは、河川整備計画策定の手順を踏んでいない」といいましたら、山鳥坂ダム工事事務所は、「最後に書き加えた」と、その事実を認めました。

「全国に例のない巨大トンネル洪水吐き」と国交省のいっている、直径11.5メートルのトンネル洪水吐きは、鹿野川ダム建設以来50数年にわたって堆積したヘドロや、鹿野川ダム水質検討会でいわれている生物が住めない状態になっているダムの下層部の水を、ダムの底から横の山にあけたトンネルでダムの下へ流します。下流の肱川、河口の長浜の海への悪影響は計り知れません。

下流への影響を検討せず、河川法に違反し密かに決め、密かに進めていたという暴挙はとても許されるものではありません。肱川では何でもできる、何をしてもいいと思っているとしか考えられません。

山鳥坂ダムの計画は、多くの方のお力とカンパによって反対が続けられてきましたが、いつも不条理な理由で事業継続になっています。平成12年(2000年)の与党3党の中止勧告を受けたダムで、全国で唯一いまだに生き残っているのがこの山鳥坂ダムです。

私は足掛け20年このダムにかかわってきて、このような状態になっていることに、い

つも忸怩たる思いで過ごしてきました。

山鳥坂ダムの事業凍結が解除になった今、改めてまた、「ダムは要らない、トンネル洪水吐きは要らない」の声を上げ、市民の皆様のお力でこの声を大きなものにしていただき、肱川の流れと、肱川流域を水害から守るために頑張っていきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

この後、今本先生と遠藤先生に、ダムの検証やダムについての動き、肱川の治水の不可解さなどお話していただきますので、よく学び力を得て進んでいきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。